

Kangaroo: 新たな指導者を求めて

内 藤 歆 修

I

第1次世界大戦中、その反戦的言動のために、またドイツ人を妻にしているという理由で、官憲によって加えられた不当な迫害や苦痛、更に *Women in Love* が1921年6月に、イギリスで出版されて以後、友人たちからの予期せぬ非難の声に、D. H. Lawrence の心はひどく傷付き、深い愛情を抱いているヨーロッパに裏切られたという思いに駆られ、故郷であるヨーロッパを後にして、1922年2月20日セイロンに向けてシシリーを出発した。パレルモ経由でナポリに行き、そこから2月26日オスタリー (R. M. S. Osterley) 号に乗船し、3月13日にはセイロンに到着し、Earl Brewster に再会している。Lawrence はこの親切で、心穏やかなアメリカ人の画家と1921年カプリーで初めて会い、それ以降常に和やかな交わりを続けてきた。Brewster は仏教哲学の研究者でもあったので、その時セイロンのキャンディで仏教寺院へ行きパーリ語と仏教の研究をしていた。その彼に誘われて当地にやって来たのである。キリスト教に異常とも言える程執着してきたが、実際に表に現れる態度は頑固な反キリスト者の姿であった Lawrence が、キリスト教をバックボーンに持つヨーロッパ世界を殆ど捨てたようにしてやって来た仏教国セイロンで、Brewster を通じて仏教の何がしかを理解しようと考えたのも当然である。彼は Catherine Carswell に次のように書き送った⁽¹⁾。

I think one must for the moment withdraw from the world, away towards the inner realities that *are* real: and return, maybe, to the world later, when one is quiet and sure. I am tired of the world, and want the peace like a river: not this whiskey and soda, bad whiskey too, of life so-called. I don't believe in Buddhistic inaction and meditation. But I believe the Buddhistic peace is the point to start from—not our strident fretting and squabbling.

しかし、到着した当初はこの国が気に入ったが、ここの余りにも暑い気候は Lawrence にとって、耐え難いものであった。大乘仏教の思想に親しむ暇もなく、わずか1カ月程滞在しただけで、早々に立ち去ることになった。この期間の成果は、'Elephant' という1編の詩だけであった。そしてセイロンについても Lawrence らしい、例の悪態をついて出て行くのである。

No, the East doesn't get me at all. Its boneless suavity, and the thick, choky feel of tropical

forest, and the metallic sense of palms and the horrid noises of the birds and creatures, who hammer and clang and rattle and cackle and explode all the livelong day, and run little machines all the livelong night; and the scents that make me feel sick, the perpetual nauseous overtone of cocoanut and cocoanut fibre and oil, the sort of tropical sweetness which to me suggests an undertang of blood, hot blood, and thin sweat: the undertaste of blood and sweat in the nauseous tropical fruits; the nasty faces and yellow robes of the Buddhist monks, the little vulgar dens of the temples: all this makes up Ceylon to me, and all this I cannot bear. Je m'en vais. Me ne vo'. I am going away. Moving on⁽²⁾.

こういった捨てゼリフのような言葉を残して彼はオーストラリアに向かう。

セイロンに来た時に乗船したオスター号には多くのオーストラリア人が同乗していた。Lawrence は彼らが皆素朴な人々であるので好感を抱いていた。そのような人々のなかに、Anna Louise Jenkins という夫人がおり、彼の作品に親しんでいたため話が合い、特に親しく付き合っていた。Lawrence 夫妻が4月24日、セイロンをオルソバ (R. M. S. Orsova) 号で発って、5月4日にフリーマントルに着くと、Jenkins 夫人が出迎え、ダーリントンにあるゲストハウスに宿泊出来るようにしてくれてあった。このゲストハウスの持ち主の1人が Mary (Mollie) Skinner というクエーカー教徒の看護婦であった。彼女も小説を書いており、Lawrence はそのいくつかを見せてもらい、彼女の書いたものに興味を持った。そして、Skinner の兄を主人公とした初期のオーストラリア植民者たちの話を書くように勧めた。彼女は翌年の殆どを使って *The House of Ellis* という小説を書き上げ彼に送った。Lawrence はこの作品を徹底的に書き直し、*The Boy in the Bush* と名付け、彼と Skinner の共作として出版した。この作品には Lawrence のオーストラリアの小説 *Kangaroo* よりずっと鮮やかに彼のオーストラリアに対する反応が描かれている。

Lawrence 夫妻はダーリントンに2週間滞在した後、滞在するのに更に良い場所を求めて、船でシドニーに向かった。シドニーから30マイル程南にある、海岸沿いの炭坑町サルールで 'Wyewurk' (ワイワーク) という名のバンガローを借りた⁽³⁾。最初、Lawrence は南半球の、世界で最も若いこの国の活力に期待していたのだが、実際に足を踏み出して人々の生活を見てみると、広大な土地に人口の少ないオーストラリアという国柄のために、人々はのんびりと、自由に平和な生活をしているように見えた。しかし、Lawrence の眼にはそれは次第に「無責任で、活力を失った自由」に見えてきた。確かにこの国は自由な民主主義国家であり、全ての人々は平等で良い生活をしている。だがその内実は 'nothing, nichts, nullus, niente' であり、何もかもが空疎で空っぽだと彼は断じるのである⁽⁴⁾。

ところで、汽船マルワ (S. S. Malwa) 号に乗ってシドニーに行く船上での Achsah Brewster 宛の手紙⁽⁵⁾では、'F(rieda) says she must stay at least three months in or near Sydney—we'll see. I am not thinking of any work.' と書いた。またバンガロー Wyewurk は1ヵ月程借りて、7月6日の船でアメリカに向かう積もりだった。しかし、1週間もたたない6月3日には、例によって

Lawrence の気が変わり、Mabel Dodge Luhan に I have started a novel and if I can go on with it, I shall stay till I have finished it — till about end of August. と書き送っている⁽⁶⁾。この小説が *Kangaroo*⁽⁷⁾ であり、6月22日には半ば書いたと言っている⁽⁸⁾。

7月15日に最終章を除き書き終えた⁽⁹⁾。短い最終章 *Adieu Australia* はこの年の9月タオスで書き加えられた。18章367頁に及ぶこの長編小説の殆どは、構想から完成まで、他に余り類例を見ない程短い期間—たった6週間—を要したのみであった。

オーストラリアに来た当初、捨てて来た筈のヨーロッパが恋しくなり、強い郷愁の念に捉えられた Lawrence であったが、*Kangaroo* を書き終える頃には、オーストラリアの魅力に憑り付かれ始めていた。

There is a great fascination in Australia. But for the remains of a fighting conscience, I would stay. One can be so absolutely indifferent to the world one has been previously condemned to. It is rather like falling out of a picture and finding oneself on the floor, with all the gods and men left behind in the picture. If I stayed here six months I should have to stay for ever — there is something so remote and far off and utterly indifferent to our European world, in the very air. I should go a bit further away from Sydney, and go 'bush.' —⁽¹⁰⁾

だが、彼の心の奥底に根を張っている禁欲的なピューリタニズムのために、この文章のすぐ後で、'But my conscience tells me not yet.' と述べている。オーストラリアに留まりたいという気持ちに、この「良心」のブレーキをかけて、8月11日アメリカへ向けてシドニーを出発したのである。

II

この作品は奇妙で、異様な小説であるが、一種独特な旅行記的自伝小説と言えよう。過去にも Lawrence が書いたものの中に *Sons and Lovers* (1913) のような自伝小説があった。だが、死ぬまで「私自身」を語り、「私」を相手に押しつけ、「私」に同意させようと努力した作家のわりには、自伝的小説と考えられるのは、全10編の長編小説中 *Sons and Lovers* とこの *Kangaroo* の2つしかない。*Sons and Lovers* の場合は、主人公 Paul の誕生の時から、25歳位の時までを描いており、炭坑夫で労働者階級の出身の父と、教員をしていたこともある中産階級出身の母との、激しい争いの間に育った Paul という作者の分身の赤裸々な記録といった物語である。

しかし、主人公の設定は実際の作者 Lawrence の当時の様子とはかなり異なったものであった。Paul は医療器具製作所に職を得て社会に出たが、Lawrence は母の亡くなる頃は、既に小学校教員で、作家を目指している若者であった。

一方、*Kangaroo* に於ては、主人公 Somers は詩やエッセイを書いている中年の作家であり、外見の姿や物の考え方も Lawrence その人といったように登場する。しかも、この作品には作者

Lawrence の過去の経験や、オーストラリアでの実生活などが生き生きと描かれているのである。そして主人公が作家として登場する作品はこの *Kangaroo* だけである。

現実の旅行中の生活と同時進行の形で描かれているこの小説はこの時期の Lawrence の生活振りや内面的な動きが活写されていて、短い期間ながら Lawrence の生きた姿を浮き彫りにした伝記的色彩の濃い作品に仕上がっており、また当時の Lawrence の心境を最も正直に伝えたものと言えよう。即ち、現実のオーストラリアを背景とした、この旅行記的自伝小説を、Lawrence 夫妻が住んだバンガロー Wyewurk、及びその近郊を主な舞台にして、Lawrence 自身が政治運動の指導者になった時を想定し、その場合の自分の行動を検討、吟味した白日夢という一脈の虚構が貫いている。ここに現れる問題は、*Women in Love* での結婚の問題が、少しずつ姿を変えて来て、色々な様相を見せ始めてきたことが原因となっていよう。結婚という男女の問題が男対男の問題に繋がり、男対男の問題に政治問題が持ち込まれる。*Aaron's Rod* の結末部分で Aaron に向かって、Lilly が言った愛と権力に関する思想が、仮想の政治的社会の中で具体的姿を与えられて発展することになる。

男と女、男と男の間の愛と権力という主題は、「リーダーシップ3部作」の第1作 *Aaron's Rod* から引き続き継続し、また形を変え、第2作 *Kangaroo* の中心テーマになっており、この作品の数多いモチーフの共通の土壌となっている。結婚生活で男性が如何に女性を支配するか、男同士の関係では優れた者に対して従うべきだという認識、及び従う者は優れた者の愛に従うべきか、それとも権力に従うべきかという問題、権威に対する個人の権利、イギリスでの、第1次世界大戦に於ける屈辱的な苦痛に満ちた、第12章の Somers の体験談など、この土壌から芽生えて大きくなってきたものと言えよう。こういった諸問題が、この作品でどのように、姿を現し、発展し、解決されていくのであろうか。

Richard Lovat Somers は年収400ポンド、物静かで、感受性の鋭い、顎ひげを蓄えた、詩やエッセイを書いている男であった。ヨーロッパでは、全てが終わり、消耗し切り、かたが着いてしまったとして、彼はドイツの貴族出身の妻 Harriet と共に新しい天地を求めて、オーストラリアにやって来る。この2人は外見からも明らかに Lawrence と Frieda であり、物語の中では終始、2人の過去の体験と合致する長々しい記述が現れる。更に作者 Lawrence は Somers の姿を借りて、自分自身の実生活の様子や生活から生まれ育っていく思想を率直に描こうとしている。

Somers は前作 *Aaron's Rod* の Aaron と Lilly が合体して出来た人間であると見做され、Harriet との結婚生活を越えて、男同士の闘争の世界に加わろうと考えている。彼の行動の規範は Aaron と Lilly の中間的なところにあり、Aaron 程「愛の衝動」(love-urge)に捉えられておらず、Lilly 程これを無視する態度も取っていない。また Aaron は妻子を捨てて各地をさ迷い続けるが、Somers の場合は、彼の側には常に Harriet が控えてその行動を見守っている。そして、女性の精神的支えを頼みに男性の世界の指導者になろうという望みを抱いているのである。

シドニーの町を歩いていると、Somers は本物の民主主義の中に浸っている気持ちになる。オーストラリアには真の民主主義があり、主役はデモス（市民）なのである。全く階級差は無く、無秩序に近い程の自由主義が横溢している。だが、ここには秩序を守っていくべき権威が無い。最高度の自由主義を享受しても、階級に伴う権力を行使する義務感を持つイギリス出身の Somers には、この無限の民主主義には耐えられない気持ちになる。この感想は作者自身が実際に抱いたものと合致している。この点を R. ルーカスは次のように述べている⁽¹¹⁾。

以前には貴族とのつきあいでのえせ紳士的好みであったものが、オーストラリアの物質主義に直面して、ロレンスの中で硬化して、公然と非民主主義的な態度となった。われわれが想起こすように、彼はすでに似た考えをバートランド・ラッセルに述べ、ラッセルはそこで彼をファシズムの先駆けと呼んだ。このオーストラリアで、彼の考えは小説「カンガルー」に表現された。その中で彼は権力と支配権の問題を扱おうと試みた。

Somers はまたこの国の自由に魅惑されるが、その半面、この自由は空虚なものでしかなく、内面的意味が欠如し、あるのは虚ろな空間の集積ばかりという感じに捉えられる。無責任な自由。「お気に召すまま」式の開放感。この様な完成された自由には絶望的な空虚感しか感じられない。無限の開放感、若さ故の眩い程の明るさ、民主主義のもたらす完璧な自由。一方、両肩にずしりとこのしかかる歴史の重さ、階級の生み出す拘束性や自由の制約、過去の陰影などが心の中に尾を引く Somers=Lawrence にとって、この環境の落差は大きかったであろう。Somers は自分の個人的な問題を、ヨーロッパ的な思考方法で、この広大なオーストラリアの問題にまで拡大した結果、疲れ果てた気持ちになり、「新しい国は、古い国より問題が多い」と考えるに至る。

妻の Harriet は Somers と比べて、外的変化に対して適応力に優れていて、新しい土地に来てもすぐに慣れ、根を下ろすことの出来る女性である。彼女は放浪の旅の間、どこに於ても、親から貰った2つの赤い漆塗りの背の高い燭台、幾枚かのショールとクッションカバー等数点の品物を広げ、部屋に飾ったり、身に付けたりすることによって、自分の家にいるような安らかな気持ちになることが出来る。オーストラリアに幾分失望した Somers は、早、自分の殻の中に閉じこもろうとしている矢先に、Harriet が、隣に住む気のいい主婦 Victoria と仲良くなり、彼女を夫 Jack Callcott と共にお茶に呼ぶこととなる。

これが発端となって Jack と Somers はチェスをしながらお互いに往き来し、次第に親しく話し合うようになる。Jack は戦争に行き負傷して帰ってから工具になっていて、一見新大陸の人間らしく無頓着で、気楽な暮らしをしている様子である。或る日曜日に、Jack は自分の妹の夫である William James Trewhella の家に Somers を誘う。この Jaz と呼ばれる男と2人は政治の話をする。Jack は Somers が紳士風ではあるが、紳士階級ではなさそうだという、普通の人に対してとは違った印象を抱いており、或いはボルシェヴィストかとも考えている。それで盛んに

Somers を政治問題の話に引き込もうとする。しかし、Somers の方は、他の人間と関わり合いになることを避けたく、政治に関心のないような態度をし続ける。それでも Jack は Somers を自分の世界の中に引き入れようと、表面上はアスレティック・クラブであるが、復員兵(diggers)が集まって作っている秘密組織 the diggers club のことを話す。彼自身そのリーダーであり、彼らは保守と革新の両陣営が抗争している間に、力を蓄え、革命が到来したら、自分たちが乗り出して革命を担おうと秘密裡に活動しているのであった。Somers は政治のことに関心がない態度を取っていても、この話を詳しく聞くと感動し興奮した。しかし、自分がリーダーになることが逃れられぬ運命と考え、この話に賛成はしても協力することについては何の返事も与えなかった。

「政治や社会のくだらないことに巻き込まれるくらいなら、国家なんてごめんだ。月に住んだほうがまだよ」(第IV章)と言って、政治活動には無関心であった Somers が、除々に政治に関わり合いになっていくのを見ながら、Harriet は苛立ちを隠せない。彼女は夫のすることは何でも知らなければ気が済まないし、何でも分担しようとする女性であった。彼女を無視して、彼女の知らない所で行動している彼の姿を見ていると虫酸が走る程許せない気持ちになるのだった。Somers は男の世界の指導者となろうとして、男同士手を携えて何ものかと戦いたいと欲している。だから、彼の人生の根は Harriet と繋がっているが、彼は男の生命の中に「新しい枝」を出したいと考えている。現在は他の男と何の関係もなく、一人ぼっちで物を書くことによって外の社会に働き掛けているが、生氣ある男たちと行動を共にしたいと言うと、

“Don’t swank, you don’t live alone. You’ve got *me* there safe enough, to support you. Don’t swank to me about being alone, because it insults me, you see. I know how much alone you are, with me always there keeping you together.”

And again he sulked and swallowed it, and obstinately held out.

“None the less,” he retorted, “I do want to do something along with men. I *am* alone and cut off. As a man among men, I just have no place. I have my life with you, I know: *et praeterea nihil.*”

“*Et praeterea nihil!* And what more do you want? Besides, you liar, haven’t you your writing? Isn’t that all you want, isn’t that *doing* all there is to be done? Men! Much *men* there is about them! Bah, when it comes to that, I have to be even the only man as well as the only woman.”
(Chap IV)

Lawrence の考えでは、妻との結合や男女の愛の中に、男は「生命の根」を張り、男同士の結び付きの間に、新しい枝葉を茂らすのである。新しい枝葉を茂らせたいという欲求は、Lilly の言う「力の衝動」であり、「愛の衝動」と対置されるべきものであろうが、後にカンガルーの説く「愛」を全く否定し去る訳ではない Somers は、「愛の衝動」をも包括しようとしているようである。前作 *Aaron’s Rod* では、女性の強さに太刀打ち出来ず、これら2つの衝動は両立し得ないという Lilly の考えが支配的で、男同士の世界の基盤である愛の衝動の世界を避けて通って来たが、*Kangaroo* では愛の衝動と真っ向から対峙する姿勢を見せている。しかし、Frieda との現

実の世界と同様に、Somers も女性の強さに打ち勝つことが難しいように見える。

Harriet は政治運動に興味を示し始めた Somers に説明を求めるが、Somers は取り合わない。夫のすることは何でも知って、共有し分担していこうとする Harriet にはそれが気に入らず、歯軋りして反抗した。「男の純粋な活動は女抜きのもので、女を越えたもの」という考えに固執する Somers であったが、Harriet の頑固な反抗の姿に影響を受けて、自分の愛する 2 人の女性である妻と母が融合し一体となった女性の出て来る夢を見る。その女性は恐ろしい、泣き疲れてむくんだような顔をして、彼女の真実の愛を裏切ったと責める。それは眠っている無防備の間に忍び寄って来た、彼の過去の弱い自己であると彼は思う。母と妻という 2 人の最愛の女性との間に強い絆が無ければ、彼女らの愛情や信頼が無ければ、Somers は少したりとも行動を起こすことが出来なかった。

For he had an ingrained instinct or habit of thought which made him feel that he could never take the move into activity unless Harriet and his dead mother believed in him. They both loved him: that he knew. They both believed in him terribly, in personal being. In the individual man he was, and the son of man, they believed with all the intensity of undivided love. But in the impersonal man, the man that would go beyond them, with his back to them, away from them into an activity that excluded them, in this man they did not find it so easy to believe. (Chap V)

Somers は自分が Lilly のように愛の衝動を切り捨ててしまわず、「力」の世界の裏付けがないと行動を起こせないことを認識しており、女性たちが彼の「非個人的」な活動を理解してくれるか不安を抱きながらも、「愛」と「力」の両方を肯定して自分の考えを行動に移して行こうとするのである。

彼は「力」を支持する、理性の Lilly と「愛」を客体視出来ない Aaron とを合わせた中庸的な人物であり、ステレオタイプ的ではない現実味のある人物像となって、より作者 Lawrence の姿に近いと言えよう。書くことを通して自らの思想を発展していくことの多い Lawrence ではあるが、心の揺れは Somers の場合少し激しい。というのは、「愛の衝動」の世界でこれだけ葛藤を重ねてまで求めた男の世界だったが、Jack Callcott に彼らの組織に加わって行動を共にしないと誘われると、Somers の心の中では再び激しい葛藤が生じる。

Somers was in a dilemma. Did he want to mix and make with this man?

.....
He half wanted to commit himself to this whole affection with a friend, a comrade, a mate. And then, in the last issue, he didn't want it at all. The affection would be deep and genuine enough: that he knew. But — when it came to the point, he didn't want any more affection. All this life he had cherished a beloved ideal of friendship — David and Jonathan. And now, when true and good friends offered, he found he simply could not commit himself, even to simple friendship. The whole trend of this affection, this mingling, this intimacy, this truly beautiful love, he found his soul just set against it. He couldn't go along with it. He didn't want a friend, he didn't want loving affection, he didn't want comradeship. No, his soul trembled when he tried

to drive it along the way, trembled and stood still, like Balaam's Ass. It did not want friendship or comradeship, great or small, deep or shallow. (Chap VI)

Women in Love での Birkin が求めた「血の盟友関係」が、ここで Somers によって否定される。「愛」に感情的には引かれてはいるが、「力」に傾斜しつつあった当時の Lawrence は結局幾度かの逡巡の結果、これを否定することになる。「血の盟友関係」も「愛」を基盤にしていたのである。ではこれからは何を求めて行こうとするのか。Somers 自身にも未だそれは分かっていたが、暗示的な考えを示している。

What else? He didn't know. He only knew he was never destined to be mate or comrade or even friend with any man. Some other living relationship. But what? He did not know. Perhaps the thing that the dark races know: that one can still feel in India: the mystery of lordship. That which white men have struggled so long against, and which is the clue to the life of the Hindu. The mystery of lordship. The mystery of innate, natural, sacred priority. The other mystic relationship between men, which democracy and equality try to deny and obliterate. Not any arbitrary caste or birth aristocracy. But the mystic recognition of difference and innate priority, the joy of obedience and the sacred responsibility of authority. (Chap VI)

Lawrence は「仏教の安らぎ」を求めてセイロンに行き、早々と逃げ去ったが、ここに Somers を通して、東洋的な宗教または死生観を取り入れようとしているようである。

しかし、この考えは後の第7章に於て、更に展開されて行く。このような内的葛藤を経ながらも、政治問題に少しずつ足を踏み入れて行く Somers は、Jack によって、the diggers club の首席 (the First) である、Benjamin Cooley に引き合わされる。彼は富裕な法律家で、顔付きと突き出した腹の格好からカンガルーと呼ばれていた。彼は魅力的で、政治家に必要な淫靡な性格と素晴らしい親切さなど、人を引きつける数々の人間的な特質を持っていたが、観念的で、非人間的な意志の代表者であった。大抵の指導者がそうであるように、人を引きつける磁力を有し、大衆に対して個人的な献身を鼓舞し要求する。カンガルーは Somers を愛でもって誘惑する。彼は「無頓着とも言える程心の広い、寛大で情熱的な人々」が、愛という唯一の炎を創造活動の唯一の生みの親だと信じて、それに身も心も委ね、一致協力して働くことを求めている。そして彼は愛によって支配しようとしている。即ち、「静かな慈父の政治」といった官憲政治を提案しているのである。

カンガルーのこういった主張を Somers は簡単に受け入れることは出来ない。「愛の衝動」から「力の衝動」の世界に入っていく彼にとって、カンガルーの主張には懐疑的にならざるを得ない。第7章 The Battle of Tongues に入ると、その章題の如くカンガルーと Somers の対立がより明瞭となる。Somers によれば、政治には「愛」でなく、権力—「力」—が重要な意味を持つ。「力」は個人各々に程度の相異はあれ備わっているが、その源泉となるものが、人間の外にいる偉大な神＝「暗い神」である。この偉大な神が、精神からではなく、下半身の自己、最も暗い自己、男根の自己とも言うべきものから、我々の中に入って来る。これは全く愛とは別

なものであると彼は主張する。

“I know your love, Kangaroo. Working everything from the spirit, from the head. You work the lower self as an instrument of the spirit. Now it is time for the spirit to leave us again; it is time for the Son of Man to depart, and leave us dark, in front of the unspoken God: who is just beyond the dark threshold of the lower self, my lower self. There is a great God on the threshold of my lower self, whom I fear while he is my glory. And the spirit goes out like a spent candle.” (Chap VII)

カンガルーの説く愛は Somers にとって呪わしいものでしかない。今や彼は「愛」ではなく愛の外にあるもの、上から霊を通してではなく下半身の暗い戸口の向こうにいる「暗い神」(the dark god)の存在を認識することが出来たのである。

I think love, all this love of ours, is a devilish thing now: a slow poison. Really, I know the dark god at the lower threshold — even if I have to repeat it like a phrase. And in the sacred dark men meet and touch, and it is a great communion. But it isn't this love. There's no love in it. But something deeper. Love seems to me somehow trivial: and the spirit seems like something that belongs to paper. I can't help it—I know another God.” (Chap VII)

Lawrence はここで、自らの一生の思想を貫く大きな象徴である「闇」を、その漠然とした存在から「暗い神」と名付け、未だ確たるものではないにしても、それに一応の具象性を付与した。これは愛の関係でなくもっと深いものである。Sons and Lovers の結末部で主人公 Paul は暗闇に背を向けて、明るい町の方へ向かって歩いて行くが、次の作品 *The Rainbow* では、「闇」の持つ力の重要性が認識され、*Women in Love* では、Birkin と Ursula が「豊饒なる闇」を内部に獲得する。Lawrence は「闇」について深い考察をこらし、探求し、一応の到達点に達した後、*Aaron's Rod* では「闇」を一端水面下に潜らせ、「愛の衝動」と「力の衝動」という対立概念を生み出した。そしてその概念の殻をカンガルーにまで引きずって来たが、水面下から蓮が花を付けて顔を出すように、彼の無意識の世界から「闇」という概念が具象性を帯びて、「暗い神」になって姿を現したのである。

Somers は、世界で最も若いこの国にやって来て新たな人間関係を求めた。産業に蝕まれた社会を変革し、新しい社会を建設することに情熱を傾けようとしていた。そしてカンガルーに出会ったのだが、彼の意図する政治的行動によってでは、新しい変革は生まれ得ないと考える。Somers はカンガルーの主張とは相入れない、別の愛、別の神を捜し求めていることを繰り返し執拗に語っている。あらゆる人がその下に集まるべき神をやっと手探りで探し当てたのである。

カンガルーに同情を感じながらも、彼の政治運動のために自らを犠牲にしたり、彼にその身を捧げたりする気には全くならない Somers の前に、Harriet との結婚生活での大きな問題である、夫と妻のどちらが支配するのかということが、持ち出される。

政治の問題より、ある意味で当時の作者 Lawrence にとって大きな問題であったのが、結婚の問題であったろう。この小説では、Lawrence の考えは Somers を通して述べられるのだが、第 9

章 *Harriet and Somers at sea in marriage* で結婚観を述べるところでは、Lawrence その人が顔を出して肉声で喋っている。自然児のような Harriet は、オーストラリアの寂寞とした自然の中で、夫と 2 人だけで生活をしたいと切望している。しかし、夫の Somers は男の世界に入って何か社会を変革したいという気持ちを持っている。そして男が色々考えた挙げ句にした決心を女に相談して理解を求める必要はないと考えている。一方、Harriet は夫のすることは何でも分かっている。なければ気が済まないし、これからすることも相談を受けたいと思っている。

このような背景を持つての、Lawrence の結婚についての考えが、この第 9 章で述べられているのである。夫が妻と共に辿る航路で、男性は (a) 尊敬され従われる亭主関白 (the lord and master), (b) 完全な恋人, (c) 親友であり且つ連れ合いの 3 つのどれかに位置付けることが出来る。だが、(a) の場合は完全に時代遅れである。(b) の場合が今日の結婚生活の理想と言えようが、完全な恋人型は破局に至る。必ずその先に幻滅が来て、離婚か、低級な罵り合いになってしまうのである。だが、この完全な恋人型でも、賢い女なら破局や不毛を嫌悪して、徐々に夫を亭主関白にする方向に持って行く。「完全な恋人号」の取る航路は常に疾風怒涛の正に地獄のような荒々しい嵐の海である。賢い女は結婚の小舟を操縦して亭主関白の世界の広大な静かな海に乗り出すのである。これが女にとっても幸せとすることになる。

Harriet はこういうことは考えない。彼女は *Harriet and Lovat* 号の船長になり、暴風雨圏へ向かって進路を取ろうとするのである。男である自分に服従せよという Somers の言葉に、私がいなければ生きて行けなくせにと言り返す。この章は、現実の Lawrence 夫妻が如何に多くのことで戦って来たかを我々に改めて思い起こさせる。Frieda は回想記の中で、2 人の闘いの原因について書いている¹²⁾。

We had so many battles to fight out, so much to get rid of, so much to surpass. We were both good fighters.

There was the ordinary man-and-woman fight between us, to keep the balance, not to trespass, not to topple over. The balance in a human relationship was one of Lawrence's chief themes. He felt that each should keep intact his own integrity and isolation, yet at the same time preserve a mutual bond like the north and south poles which between them enclose the world.

Then there was the class war. We came from different worlds. We both had to reach beyond our class, to be reborn into the essence of our individual beings, the essence that is so much deeper than any class distinction.

Then beyond class there was the difference in race, to cross over to each other. He, the Englishman, Puritan, stern and uncompromising, so highly conscious and responsible; I, the German, with my vagueness and uncertainty, drifting along.

Only the fierce common desire to create a new kind of life, this was all that could make us truly meet.

'the Englishman, Puritan, stern and uncompromising, so highly conscious and responsible' であ

る民族的、性格的特質というのは、彼の母親から多く受け継いだものであろう。夫婦として付き合い合っていくには、かなり難しい気質の Lawrence に対して、'the German, with my vagueness and uncertainty, drifting alone' といった Frieda は夫と殆ど正反対の性格を持つが故に、初期の結婚生活では2人のこの様な性格は完全な恋人としての関係が続けることに役立ったであろう。若い頃 Lawrence は母の強い影響下に置かれ母子相姦的な親子関係に苦しみ、そこから逃れようとして多大な努力を払った。そして、今度は Frieda との夫婦生活に於て、「完全な恋人」の時代を過ぎ、「母子相姦」的夫婦関係に陥り、そこから抜け出して、「亭主関白」型の夫婦生活に入ろうとする戦いをしているのである。この様な男性優位を妻に認識させる手段として、本作品では政治あるいは革命が持ち出され、そこに於て「男性」が発揮されるのだとされている。

Lawrence は男性優位を説くのにただ政治だ革命だと言っているのでもないし、「愛」と「力」を持ち出すだけでもない。上にも述べたように、更に思索を深め、「暗い神」を生み出すに至るのである。

Poor Harriet! No wonder she resented it. Such a man, such a man to be tied to and tortured by!

And poor Richard! To be a man, and to have a man's uneasy soul for his bed-fellow.

But he kicked against the pricks. He did not yet submit to the fact which he *half* knew: that before mankind would accept any man for a king, and before Harriet would ever accept him, Richard Lovat, as a lord and master, he, this self-same Richard who was so strong on kingship, must open the doors of his soul and let in a dark Lord and Master for himself, the dark god he had sensed outside the door. Let him once truly submit to the dark majesty, break open his doors to this fearful god who is master, and enters us from below, the lower doors; let himself once admit a Master, the unspeakable god: and the rest would happen. (Chap IX)

この様に新たな思考が加わっても、'Harriet and Lovat' 号という、彼らの結婚という船が、Somers を船長とし Harriet を船乗りとして、海図にない未知の海に船出して行くために、お互いの合意を得るには、未だ道のりは程遠い感があった。

家庭で Harriet と男女の主導権争いの戦いをしている一方で、Somers は政治運動の問題ではカンガルーの反対者で、且つ労働党の指導者である Willie Struthers と会見する。Jaz は Somers を社会主義者や労働者の溜まり場である、キャンベラ・ハウスに連れて行った。Struthers は「あの偉大な洗いざらしの中産階級」(the great Washed Middle Class) は、ヒルのように我々の生き血を吸っている。この連中に不信を投げ、我々はお互いを信頼し合おうと雄弁に述べる。そして彼は Somers に「真面目な建設的な社会主義者の新聞」の編集を依頼する。Somers は労働者の息子だから理解出来るだろうし、裏切ることもないだろうというわけである。

Struthers は新しいデモクラシーの社会に於ける新しい情熱の絆としての友愛を求めている。我々の社会は家庭に基づき、家庭は社会の基盤であり、その上に、仲間との非利己的な神聖な社会的関係—同志愛、友愛—がなければならない。即ち、Struthers の求めているものは、仲間

対する男の愛、「仲間愛」(the mate love)であった。

だが、Somers はこれに反論する。人間の愛や人間の信頼は、常に危険を孕んでいるのである。というのは個性は頑固で、強情で、人間関係には危険で、信頼出来ないものである。個性と個性とは反発し合うものであるからである。だが反発しなければ、個性は本来の姿を失ってしまい、我々は自己の完全性を失ってしまう。自己を失うことは生きながら死ぬのと同じことであり、自分自身はいいにしても他人に強制することは出来ない。愛は人間の間で最高なものであるが、その愛がお互いを締め付け始めると、災いを招くものでしかなくなる。悲惨に向かって求愛するようなものとなる。そこで、「全ての情熱の源泉である神」(the God who is the source of all passion)であり、「彼らを孤立させながらも調和のうちに生かしめてくれる、全ての情熱と命の源泉である深い神」(the deep God who is source of all passion and life to hold them separate and yet sustained in accord)がいなければ、愛する仲間たちはお互いを、愛も、感情も、全てを粉碎してしまうだろうと Somers は考える。そして、

Any more love is a hopeless thing, till we have found again, each of us for himself, the great dark God who alone will sustain us in our loving one another. Till then, best not play with more fire. (Chap IX)

と愛に見切りを付けている。そこで Struthers が愛以外の何が信じられるのかと執拗に問い掛けて来るのに、Somers は理解されないのを承知で次のように述べる。

"It *does* need some sort of religion."

"Well then—well then—the religious question is ticklish, especially here in Australia. But all the churches are established on Christ. And Christ says Love one another."

Richard laughed suddenly.

"That makes Christ into another political agent," he said.

"Well then—I'm not deep enough for these matters. But surely you know how to square it with religion. Seems to me it *is* religion—love one another."

"Without a God."

"Well—as I say—it's Christ's teaching, and that ought to be God enough."

Richard was silent, his heart heavy. It all seemed so far from the dark God he wished to serve, the God from whom the dark, sensual passion of love emanates, not only the spiritual love of Christ. He wanted men once more to refer the sensual passion of love sacredly to the great dark God, the ithyphallic, of the first dark religions. And how could that be done, when each dry little individual ego was just mechanically set against any such dark flow, such ancient submission. As, for instance, Willie Struthers at this minute, Struthers didn't mind Christ. Christ could easily be made to subserve his egoistic purpose. But the first, dark, ithyphallic God whom men had once known so tremendous—Struthers had no use for Him. (Chap XI)

Struthers の主張は一種の平等主義であり、個人差を認める Somers には到底肯定出来ないものである。

革命家であるカンガルーと社会主義者である Struthers たちの言う人類愛、同志愛、男同士の

団結というのは、結局キリスト教の愛の精神そのものであった。カンガルーが説くのは、キリスト教的博愛主義の独裁性であり、Struthersの主張するところもキリスト教的な一種の平等主義基盤に立つ社会主義的革命で、個人差を認める立場のSomersには納得出来るものではない。上の引用のように、Struthersは自分が述べている「愛」がキリスト教の説く「愛」と何ら変わるところがないということ認識していない。Somersの考えでは、このキリスト教の愛の精神では、ばらばらに切り離された人類を救うことは出来ずに結局恐るべき「暴徒精神」に終わるのである。人類を救えるのは、あの根源的な愛、「暗い神」の官能的、情熱的な愛しかない。それ故、「暗い神」の存在を意識もせず、必要もしていないStruthersの申し出をSomersは拒否してしまう。

この左右の政治集団の指導者から協力を求められたSomersは両方の考え方に同意できない。特にカンガルーに別れを告げたSomersは、2人の会話の途中、彼の顔に突然に現われた激怒の形相を見て、彼が復讐の暴徒のように思われ、恐怖に捉えられる。そして、彼に捕らえられるのではないかと恐れ始める。この恐怖が、第12章 The Nightmare という長い1章で述べられている。彼を本国から追い立てたものが、この悪夢のような体験の恐怖と屈辱であったのは間違いない。それは第1次世界大戦中にSomersがCornwallの海岸で、スパイの嫌疑を受けながら生活した経験である。これは正に作者Lawrenceの体験そのもので、妻Friedaの回想記の記述と酷似している。Lawrenceの不用意で、無分別な言動と、妻がドイツ人であるという理由で、ドイツのスパイという嫌疑をかけられて、官憲から陰險な捜索を受け、嫌がらせの徴兵検査は3度びに及び、Cornwallからの強制退去の命令さえ出た。

大戦末期のイギリスでは犯罪的欲求の波が起こり、恐怖の支配が行なわれた。彼は自主の魂や個人の内面の尊厳を失う人々を数多く見てきた。優れた英国魂でさえ、圧力に屈し時流に押し流されたのである。この様な一種狂気のような政治の中で、彼は本質的な真実、名誉、正義を深い部分で自覚した。真実の人間は狂気の中でも正気を失ってはならないのだ。危機的状況に於ても、または危機が大きければ大きい程、自分自身の魂への孤立した関心はより強烈でなければならない。

Somers=Lawrenceは、ここで群集の持つ正しい力を識別し、区別している。この様な態度を詳述することでSomersの性格に深みを加えている点でも、この章は欠くことのできない1章といえよう。しかも、作者が他の章と比べて2倍以上の分量を与えてまで述べた受難の記録には、自叙伝的な克明な記述があり、近代の西欧文明から深い傷を受けた1人の人間のその文明に対する癒し難い絶望が描かれている。その結果、Somersは悪夢のような戦争中の記録を全て振り払い絶ち切った。そして仲間たちからも祖国イギリスからも切り離されたと感じた。もう同胞もなく祖国もないのである。

人間は偉大な理想に裏切られたと感じる時、そこには復讐のみが残される。カンガルーも、愛の服従や犠牲よりはむしろ愛の力という古い観念を力説する復讐の暴徒となり、Struthersも人

類愛に根ざした百合の木が枯れる直前の最後の葉のように、共産主義を信ずる暴徒である。一方、Somers は古い理想からきっぱり手を切り、人類と一切関係を断ち、愛や同情や憎悪からも逃れ去り、独りになることが望みであった。

では、Somers の信ずる「暗い神」とは一体何なのであろうか。それは勿論知的意識の産物である観念的な神ではない。

“There is God. But forever dark, forever unrealisable: forever and forever. The unutterable name, because it can never have a name. The great living darkness which we represent by the glyph, God.”

There is this ever-present, living darkness inexhaustible and unknowable. It is. And it is all the God and the gods.

And every *living* human soul in a well-head to this darkness of the living unutterable. Into every living soul wells up the darkness, the unutterable. And then there is travail of the visible with the invisible. Man is in travail with his own soul, while ever his soul lives. Into his unconscious surges a new flood of the God-darkness, the living unutterable. And this unutterable is like a germ, a foetus with which he must travail, bringing it at last into utterance, into action, into *being*. (Chap XIII)

彼が仮に「暗い神」と名付けた神は、本当は名前を付けようがない程偉大な神で、眼に思い浮かべることさえ不可能なもので、不可知にしておくしかない神である。一旦定義したら1つの固定した像として我々は認識するようになり、1個の観念、1体の偶像でしかなくなってしまふ。

The long travail. The long gestation of the soul within a man, and the final parturition, the birth of a new way of knowing, a new God-influx. A new idea, true enough. But at the centre, the old anti-idea: the dark, the unutterable God. This time not a God scribbling on tablets of stone or bronze. No everlasting decalogues. No sermons on mounts, either. The dark God, the forever unrevealed. The God who is many gods to many men: all things to all men. The source of passions and strange motives. It is a frightening thought, but very liberating.

“Ah, my soul,” said Richard to himself, “you have to look more ways than one. First to the unutterable dark of God: first and foremost. Then to the utterable and sometimes very loud dark of that woman Harriet. I must admit that only the dark god in her fighting with my white idealism has got me so clear: and that only the dark god in her answering the dark god in me has got my soul heavy and fecund with a new sort of infant. But even now I can't bring it forth. I can't bring it forth. I need something else. Some other answer.” (Chap XIII)

これは「情熱と奇妙な動機の源泉である神、自己の聖なる孤独を自覚させる神」である。だがこれらの言葉は大変抽象的なもので、必ずしもこの神の具体的な概念を与えるものとは言いにくい。それが何であるかは相変らず判然としていないのは、神の漠然とした存在は見出したが、この時点に於ては、未だLawrence 自身その正体を把握し切れなかったのであろう。

Somers は大衆と「暗い神」について考える。大衆というのは、方向性は持っているが、理性で動くものではないし、理性によって形成されるものでもない。集団の意識が激しくなったり、

肥大化して行けば行く程、理性的で個人的な意識はその大衆の中に埋没し、降下し、活動は停止する。人間など脊椎動物は、包み込むような愛の振動と畏敬や恐怖の念で群れを支配する権力欲の振動という2つの大きな振動によって統一される。第1に権力という大きな影響力で、信頼、恐怖、従順などを植えつけ、第2に愛という影響力で、生産能力と安心感を生むのである。この均衡が崩れた時に、「暴徒の状況」が生まれる。即ち、力の支配だけになると暴徒が発生する。革命は権力者の階級に対する大爆発であり、一時的にせよ、方向性と指導性を持つ。その破壊的狂気には目的があるのである。大衆の蜂起はその時代の支配的意志に向けられる復讐の行為である。その中核には、「力と畏ればかりではなく、独特の愛らしさといった長所を有する単独の魂の真の威厳」と、「暗い神と暗い血の通う大衆との間に素裸で立っている単独の魂」を持つ人物がいなければならない。

カンガルーは財産所有者や労働者やその他全ての者を、何ひとつ失うことなく救いたいと考えているようである。だがそれは全く不可能な相談である。Somersがその様な考えに至った頃、キャンベラ・ホールで労働者の威示運動集会があり、Struthersの演説中、暴徒の襲撃でカンガルーも重傷を負い、病院に担ぎ込まれるという事件が起こった。暴徒の起こしたこの事件の後、Jackはその時の模様を語る。彼は窓の鉄棒で3人もの人を叩き殺し、その時の異常な快感を話す時には世にも不思議な笑みが顔に浮かんでいた。普段は善良で大人しく、紳士的な態度の小市民であるJack Callcottは、政治活動の中で、突然理性を失って凶暴性を発揮するのである。「愛」という偉大な言葉の裏に潜んでいる、人間の凶暴性。現代人の心の中に不気味に存在するアンバランスなものを、このJackの行為は示していよう。まして集団化すれば更に残忍性の増した暴徒となっても不思議はない。Somersの神聖な孤高への志向はここに於てより意味を持って来るのである。

銃弾が腹部に当たり、致命傷を負ったカンガルーは、死の床にSomersを呼び出し、執拗に愛を求める。しかし、彼はそれを拒否する。見苦しいまでのカンガルーの愛の強制に対するSomersの情容赦ない拒絶の態度。Lawrenceがこれ程までに手加減せずに描いたのは、愛の権化で、且つ彼がその存在を許すことのできない集団の指導者であるカンガルーの欺瞞性を暴き、その正体を暴露しようとしたためであろう。また「愛」を見苦しく求めるカンガルーに、厳しい孤独を志向する自分を対置する意図があったに違いない。Somersは鋭い考察力をもってカンガルーの正体を見抜いている。また自らの魂が肯定出来ない愛を受け入れないという非妥協的とも言える程の誠実な態度でカンガルーを拒否したのは、魂の孤立についての深い思考、及び「暗い神」との交流の結果から来ている。この後程なくカンガルーは息を引き取る。Somersもカンガルーの象徴する愛など一切のものを清算したのであった。

カンガルーが死んで訪れて来たのはJackだけであった。Somersはカンガルーが自分のことを文明の敵と言ったが、必ずしも自分はそうではないとJazに話す。

“The enemy of civilisation? Well, I’m the enemy of this machine civilisation and this ideal civilisation. But I’m not the enemy of the deep, self-responsible consciousness in man, which is what I mean by civilisation. In that sense of civilisation, I’d fight for ever for the flag, and try to carry it on into deeper, darker places. It’s an adventure, Jaz, like any other. And when you realise what you’re doing, it’s perhaps the best adventure.” (Chap XVIII)

「人間の内なる、信頼出来る深い意識」なるものが Somers の言う文明であるが、それを守るためには、彼はいつまでも戦い続け、思想の冒険を続けて行くつもりなのである。

出発の日、船に乗った Somers は、堪らない程愛している不思議な国オーストラリアを去るの後ろ髪を引かれる思いであった。手に持っている別れのテープが切れた時、まるで愛情が絶ち切れ、心の琴線がプツリと切れたようであった。Lawrence 夫妻がセイロンからアメリカへ向かう時、たまたまその途中にあったからという理由で立ち寄り、すぐに去るつもりのオーストラリアであったが、1つの長編小説を書き、結局3ヵ月余りも滞在することになった。そこで見たオーストラリアの風土と、知り得た政治情報を舞台に、Lawrence は当時の自身の心境や思索の過程と結果を劇化した一種の白日夢とも言うべきものを書いた。社会改革を目指した革命を志向する集団、その首領カンガルー、及び他の社会主義者たちと Somers を中心にした物語だが、彼がオーストラリア出発の船から見たこの国は青空を背景に遠く小さくなって、その舞台上の人々も消えてしまったように見えた。ここでの経験や思索は明瞭な形を取らず、あの「暗い神」ですらはっきりした姿を現さず、暗闇の中にひっそりと存在しているだけである。

以上のことを考察してみると、*Kangaroo* は、新たな大きな進展を見る前の Lawrence の思索の過程の経過報告とも言えよう。

注(1) Letter to Catherine Carswell, 24 January 1922. (*The Cambridge Edition: The Letters of D. H. Lawrence, vol. IV, p.175*, 以下 *Letters IV* と省略)

(2) Letter to Mabel Dodge Sterne, 10 April 1922. (*Letters IV, p.225*)

(3) Letter to Catherine Carswell, 22 June 1922. (*Letters IV, p.271*)

The house is an awfully nice bungalow with one *big* room and 3 small bedrooms, then kitchen and washhouse—and a plot of grass—and a low bushy cliff, hardly more than a bank—and the sand and the sea. The Pacific is a lovely ocean, but my, how boomingly crashingly noisy as a rule.

(4) Letter to Else Jaffe, 13 June 1922. (*Letters IV, p.263*)

(5) Letter to Achsah Brewster, [20 May 1922]. (*Letters IV, p.243*)

(6) Letter to Mabel Dodge Sterne, 3 June 1922. (*Letters IV, p.251*)

(7) Letter to Thomas Seltzer, 11 June 1922. (*Letters IV, p.261*)

(8) 注(3)参照

—I am doing a novel here—half done it—funny sort of novel where nothing happens and such a lot of things *should* happen. Scene Australia.

(9) Letter to Thomas Seltzer, 18 July 1922. (*Letters IV, p.278*)

I finished *Kangaroo* on Saturday —I don’t suppose you’ll like it a bit.

- (10) Letter to S.S.Koteliansky, 9 July 1922. (*Letters IV*, p.275)
- (11) R.ルーカス: チャタレー夫人の原像: pp.219-220
- (12) Frieda Lawrence: *Not I But the Wind*: Foreword pp.vi-vii

参考書誌

1. *Kangaroo*: The Phoenix Edition: William Heinemann: 1970.
2. *Kangaroo*: Penguin Book: 1975.
3. Roberts, Warren, James T. Boulton and Elizabeth Mansfield: *The Cambridge Edition: The Letters of D. H. Lawrence: Vol. IV, 1921-24*: Cambridge University Press: 1987.
4. Huxley, Aldous (ed.): *The Letters of D. H. Lawrence*: Heinemann: 1932.
5. Moore, Harry T.: *The Collected Letters of D. H. Lawrence: Vol. II*: William Heinemann: 1965.
6. Aldington, Richard: *Portrait of a Genius, But...*: William Heinemann: 1950.
7. Daleski, H.M.: *The Forked Flame: A Study of D. H. Lawrence*: Faber and Faber: 1965.
8. Draper, R.P. (ed.): *D. H. Lawrence; The Critical Heritage*: Routledge and Kegan Paul: 1970.
9. Holderness, Graham: *Who's who in D. H. Lawrence*: Heinemann: 1976.
10. Hough, Graham: *The Dark Sun; A Study of D. H. Lawrence*: Duckworth: 1956.
11. Lawrence, Frieda: *Not I But the Wind...*: William Heinemann: 1935.
12. Leavis, F.R.: *D. H. Lawrence; Novelist*: Chatto and Windus: 1967.
13. Moore, Harry T.: *The Intelligent Heart*: Farrar, Straus and Yong: 1954.
14. Moore, Harry T.: *The Life and Works of D. H. Lawrence*: George Allen and Unwin: 1951.
15. Moore, Harry T.: *The Priest of Love; A Life of D. H. Lawrence*: William Heinemann: 1974.
16. Nehls, Edward: *D. H. Lawrence; A Composite Biography*; Vol.III: The University of Wisconsin Press: 1977.
17. Sagar, Keith: *The Life of D. H. Lawrence*: Eyre Methuen: 1980.
18. Tiverton, William: *D. H. Lawrence and Human Existence*: Rockliff: 1951.
19. 阿部知二(編): ロレンス研究: 英宝社: 1970.
20. 伊藤整・永松定(訳): A. ハックスレー(著): D. H. ロレンスの手紙: 弥生書房: 1971.
21. 奥村透(訳): R. ルーカス(著): チャタレー夫人の原像: 講談社: 1981.
22. 甲斐貞信: ロレンスと神話: 山口書店: 1988.
23. 北沢滋久: D. H. ロレンス: 墨水書房: 1973.
24. 倉持三郎: D. H. ロレンス: 清水書院: 1987.
25. 佐々木学: D. H. ロレンスの文学と思想: 松柏社: 1980.
26. 中橋一夫: ロレンス: 研究社: 1970.
27. 中村佐喜子: ロレンスを愛した女たち: 中央公論社: 1983.
28. 西村孝次(編): ロレンス: 研究社: 1971.
29. 羽矢謙一: D. H. ロレンスの世界: 評論社: 1978.
30. 村岡勇: D. H. ロレンス: 研究社: 1970.
31. 森晴秀: ロレンスの舞台: 山口書店: 1978.
32. 山口圭三郎(訳): M. スピルカ(著): 愛の倫理: 篠崎書林: 1971.
33. 山下圭一郎(訳): T. スレイド(著): D. H. ロレンス: 中央大学出版部: 1975.
34. D. H. ロレンス研究会編: ロレンス研究: カンガルー: 朝日出版: 1990.